

保育者養成への社会的要請に関する自由記述の分析

A Qualitative Analysis of Social Needs in Preschool Teacher Training

(2008年3月31日受理)

中 田 周 作

Shusaku Nakada

Key words : 保育者養成, 社会的要請, 質問紙調査, 自由記述の分析

保育者養成機関は、現在、転機を迎えている。こうした社会状況下で保育者の資質としては、どのような能力が必要なのか自由記述の分析を通して明らかにすることが本稿の目的である。調査票は、岡山県下のすべての保育園¹⁾および幼稚園の園長に送付した。回収率53.5%, 自由記述の有効回答率79.4%という極めて高い数値となっており、この問題の関心の高さをうかがうことができる。分析の結果を簡略に述べると、養成段階には保育者の資質として人間性と専門知識の獲得が要請されており、研修段階では実践能力の獲得が要請されていることが明らかになった。なかでも、新しい知識や系統的な学習による資質の形成は、養成段階における学習が有効であると考えられている。しかし、保育者の資質としての人間性は、養成段階のみで解決されることのない困難な課題であるが、例えば、コミュニケーション能力や社会性などは保育者として重要な資質なので、養成段階と研修段階で継続的に研鑽に努めなければならない。いずれにしても養成段階と研修段階は、直接的に保育者養成の責任を負っており、両者が協力しなければ理想的な保育者養成をなしえないことが、改めて実証的に裏付けられたといえよう。

はじめに

保育者養成機関は、現在、転機を迎えている。例えば、これまでの専門学校や短期大学を中心とする保育者養成に加え、四年制大学での養成が急激に増加しつつある。また、保育園と幼稚園の一体化施設である認定こども園の設置、保育園園長の資格化なども検討されている。こうした保育者養成を取り巻く社会的状況の変化を受け、保育者養成機関は一連の変化に対応できる保育者を養成するため、カリキュラム改革を実行する必要がある。そこで、保育者養成機関に対する期待について明らかにすることを目的とした調査を実施した。この調査は、そうしたカリキュラム改革の基礎的データを提示することを企図している。

調査の概要

保育を取り巻く社会的環境は地域差が大きい。そのため今回の調査は、岡山県下のみを調査対象とした。調査対象は『岡山県教育関係職員録』および岡山県のホームページ²⁾をもとに、岡山県下すべての幼稚園および保育園のリストを作成し、園長宛に調査票を送付した。調査実施時期は2006年10月から12月。配布数は737部、回収数は394部(回収率53.5%)であった。なお本稿では、この調査の自由記述の部分のみを分析する。他の部分については調査票も含め、高旗・中田・池田(2007)を参照されたい。

分析の枠組み

(1) 設問の意図

今回の調査で回答を求めた自由記述は次の通りである。

J. 昨今、保育現場ではこれまで以上に保護者からのニーズに対応することが求められていると言われております。そこで、「保育者の資質」について、保護者がどのような資質を求めているとお考えでしょうか。また、先生ご自身のご経験から、保育者の養成機関に求められるものについて、ご自由にご意見をお書き下さい。

(1) 保護者の求める「保育者の資質」

(2) 先生ご自身のご経験からの意見

以下、便宜上、前者をJ. (1)とし、後者をJ. (2)と表記する。J. (1)は、保護者の求めている保育者の資質は、どのようなものであると園長（回答者）は考えているのか、という質問である。言い換えるならば、保育現場に寄せられている保育者の資質に関する要望をどのように想定しているのかということである。J. (2)は、園長自らの経験に基づき保育者の養成段階に求めることは何か、という質問である。つまり、新人保育者の力量不足により逆照射される保育者の養成段階への要望である。要するに、この質問項目の構成は、J. (1)では、保育者の資質を問うており、J. (2)では、養成段階への要望を問うている。したがって、J. (2)のみに焦点を当てれば、現在の保育者養成機関に対する保育者の資質形成に関する要望が明らかになる。しかし、これでは保育現場から保育者養成機関へという一方的な見方だけに陥ってしまう恐れがある。もちろん保育者養成機関が、J. (2)で指摘されたことを参照にカリキュラム改革を進めていくことは重要であることはいうまでもない。

そこで本稿では、ここにもう1つ視点を付け加えたい。それは単純に図示すると、「=J. (1) - J. (2)」の部分である。この領域は素直に受け取れば研修段階で獲得していく資質である。しかし、果たしてそれだけであろうか。ここには、保育者の資質として保護者から求められているが、養成段階に求めるべきではないと園長が考えている領域でもある。要するに、養成機関にはできないと

初めから諦められている資質が含まれている可能性もある。しかし、これは保育者養成機関自身が能動的に判断すべきことである。

以上、あくまでも園長による記述を前提としながら、保育者の資質形成に養成段階と研修段階が有機的に連携し、高等教育機関における保育者養成機関のカリキュラム編成に対するフィードバックを得られるよう分析を進めていく。

(2) 分析の視点

回収票に記載された自由記述の内容をキーワードごとでカウントした結果（高旗・池田・中田，2007）や、調査票の選択肢の部分の単純集計の結果（高旗・中田・池田，2007）からすると、①保育者自身の性格、②保育者としての専門性、③保護者対応能力、④社会人としての社会性という、4つの点について関心が高かった³⁾。そこで今回は、この4つを分析の視点として採用する。そして、これらの視点から、それぞれの記述を検討していく。もちろん、自由記述欄の質的分析なので、ここで検討するのは、それぞれで見受けられた個別の事例であり、全体を代表することは期待できない。また、特定の内容に関する記述の多い／少ないで全体を推し量ることも妥当ではなかろう。しかし、ここに寄せられた事例は、園長たちが日頃感じているリアルな日常の一コマであることは間違いない。

(3) 回答の概要

今回の調査では、回収票の極めて多くに自由記述がなされていた。有効回収票数は394部であり、うちJ. (1)では313部(79.4%)、J. (2)では301部(76.4%)に何らかの記述があった。前者の質問に記述票が多いのは、一部の調査票で、前半の記入欄に全ての回答を記入しているのではないと思われる調査票が散見されたことが1つの原因かとも思われる。しかし、今回の調査では、J. (1)とJ. (2)には、別の回答欄を設けているため、この回答欄を基準に、J. (1)とJ. (2)に分けた。なお、事例先頭の4桁数字は、調査票のコードである。また、自由記述の引用文中の下線は、当該箇所のキーワードに対して、著者が付したものである。

分析の結果

(1) 保育者自身の性格

ここでは、どのような人柄が保護者から望まれていると園長たちは感じているのか(=J. (1)), また、園長自身は、どのような人柄が保育者として望ましいと考えているのか(=J. (2))が記述されている。

J.(1) 0109 いつも笑顔で、暖かい雰囲気が感じられる人。

J.(1) 0119 明るくて、はつらつとしている人。

J.(1) 0133 優しくて思いやりのある先生。笑顔で子ども達一人ひとりを大切に受け入れてくれる先生。

J.(1) 0144 優しい。温かい人間性。明るい。活発。

J.(1) 0194 いつもここにこほがらか。

J.(1) 0200 あたたかい人間性の先生。

J.(1) 0260 明るくて、ユーモアがあること。

J.(2) 0105 いつも笑顔でどんなときでも明るく、気持ちのよい挨拶ができ、素直な心を持ち、周りの人と協調できる人。

J.(2) 0281 新卒の学生さんに求めるのは、元気な笑顔とやる気です！！

J.(2) 0348 いつも明るいあいさつとすてきな笑顔。

J. (1), J. (2)ともに、明るく、元気で、優しく、暖かい人柄の保育士が強く望まれていることがわかる。こうした指摘は、自由記述の中で、かなり頻繁に見受けられた。保育者という仕事と、明るく元気なパーソナリティーの親和性の高さは経験的に了解可能であるが、この記述の中でも改めて、その重要性が指摘されている。

J.(1) 0088 人格、教養、知識すべてのものを求めている。

J.(1) 0144 優しい。温かい人間性。明るい。活発。

J.(1) 0200 あたたかい人間性の先生。

J.(2) 0065 経験年数を問わず、人間性が一番。

J.(2) 0073 常に自己研鑽し、人間性、専門性を高めようとする向上心を持った人。

J.(2) 0108 一番大切なことは“人間性”である。

J.(2) 0271 できないより、できるにこしたことはありませんが、要は人間性の問題だと思います。

次に、人間性を求める記述も頻出していた。ここに、保育という仕事が全人格的なものであると捉えられていることが分かる。ただし、この人間性の部分については、2面を持ち合わせているようである。つまり、1つめは、子どもたちに対して誠実に接しなければならないという、いわば保育技術的側面である。2つめは、保育技術等を習得して行くにあたって、日々の実践の中から学ぶ前提としての人間性という、学習者という姿勢としての人間性という側面である。後者の方は、次のキーワードである努力や向上心に共通する側面であると考えられる。

J.(2) 0065 周りの意見に耳を傾け、素直で前向きな姿勢であり、自己を磨いていこうとする教師を望む。

J.(2) 0073 常に自己研鑽し、人間性、専門性を高めようとする向上心を持った人。

J.(2) 0105 プラス思考でボランティア精神があり、努力をおしまない人。

J.(2) 0281 新卒の学生さんに求めるのは、元気な笑顔とやる気です！！

J.(2) 0348 誠実で、自分自身を向上発展さすことのできる人です。

J. (1)と比較して、園長自身の経験(=J. (2))に多く見られたのは、努力や向上心といった前向きな姿勢を持った保育者である。保育の領域に限ったことではないだろうが、日々の保育現場こそが研修段階の基本的実践であることを考えれば当然の指摘であろう。こうした姿勢や態度があつてこそ、研修段階としての保育現場でも様々な保育技術を身につけることが期待できる。しかし、保育技術ではなく姿勢や態度に関することを、園長は保育者養成機関に求めていることは注目し得る。つまり、保育者養成機関が労働市場に供給している人材の中には、やる気の見られない人材が混ざっている点を園長たちは気にしているのである。こうした人材は、研修段階でのスキルアップも望めないし、なによりも保護者が求めている明るく元気で優しい保育者像と合致しないところに起因する問題でもあろう。保育者養成機関は、こうした要望の重要性は容易に理解できるが、完全に克服するには必ずしも容易な課題ではないだろう。

(2) 保育者としての専門性

- J.(1) 0020 プロとして育児や保育について相談できる保育者、又、安心して任せられる保育者（人格的に）。
- J.(1) 0096 幼児理解がきちんとでき、幼児の内面に沿った教育ができる人。幼児の心身の健康に配慮し、心豊かな子どもの育ちを援助できる人。環境構成を工夫し、幼児に様々な体験をさせてくれる人。物事のけじめを幼児にわかるように丁寧に教えてくれる人。
- J.(1) 0146 最近、支援を必要とする幼児が増加しています。また、心の教育も大切になっています。
- J.(1) 0166 指導力の充実：子どもの思いを受け止め、大切に援助する。
- J.(1) 0201 一人ひとりの個性を認め理解し一人ひとりに合った指導援助をしてくれる保育者が望まれている。また集団での様子をよく知らせてくれる保育者。
- J.(1) 0288 一人一人を認めたり、よくないことは厳しく叱ってくれたりする頼りがいのある教師。幅広くいろいろなことや遊びを教えてくれる教師。

まず、J.(1)であるが、子どもと関わるための専門的な技量が求められている。その内容は、育児相談、発達理解、指導や援助する力量など極めて多岐にわたっている。これは園長自身の経験ではなく、現在の保護者が求めている保育者の資質という質問項目を受けての園長自身の想像であるため、想定される多くの資質が列挙されたのであろう。

- J.(2) 0021 養成期間中に、できるだけ多くの保育材料を用意し、年齢に合った遊びなど、現場に出てすぐ活用できるようにすると、自身をもって保育するきっかけができると思います。又、指導案の書き方等も、しっかり学んでおくと現場ですぐ生かせると思います。
- J.(2) 0069 発達障害を持つ幼児が増えているので、幼児理解のための幅広い知識を持っていることなどが求められる。
- J.(2) 0094 病気、薬、怪我、感染症について。
- J.(2) 0132 虐待についての知識や対応。障害児保育、食物アレルギー児の対応等、一人一人に合った保育を日々、職員が共通理解し、一つになり、頑張っている。

ます。又、若い母親に対しては、育児相談をしたり、母親の気持ちをを全面的に受容し、育児をする喜びを感じとることができるようにしています。

- J.(2) 0153 食育に関する知識と実践。
- J.(2) 0173 現在、発達障害の子どもを受け入れることが多くなり、研修などで勉強していますが、まだまだ十分な知識がなく、対応の仕方などでとまどう事がよくあります。できれば養成機関で少しでも理解しておくほうがよいのではないかと私は思います。
- J.(2) 0185 子供の事より、親中心の自分本意の保護者が増えてきたように思う。保護者のストレスや悩みを共有しつつも、育児指導のできる保育士が望まれていると思う。また、気になる子、軽度発達障害について理解し、指導できる保育士であってほしい。
- J.(2) 0273 目上の人に対しての敬語の使い方と書類作成の時、漢字・文章面での指導をお願いしたい。

J.(2)は、園長が保育者養成機関に求める保育者の資質であるが、園長自身の経験を基盤にして回答を求めているためであろうか、J.(1)と比較すると、一定の傾向が見られる。まず第1の傾向は、いわば時代に対応した新しい保健や医療等に関する知識を持っていることである。具体的には、障害児や発達障害、食育や食物アレルギーなどが挙げられる。第2の傾向は、記録等に関することである。ここでの自由記述では、指導案や書類の書き方といった点が指摘されているが、他の記述の中では基本的な読解能力、国語力の不足も指摘されていた。

両傾向ともに共通することは、それらの資質を身に付けるためには、一朝一夕のうちに体験レベルで学べるのではなく、時間をかけて系統的な学習を要するということであろう。したがって、研修段階よりも養成段階の方が学びやすいと考えられている。

- J.(1) 0130 発達障害児と他機関との連携の紹介。
- J.(2) 0149 保健師・児童相談所等の連携が特に近年必要となって来た。

例えば、児童虐待、発達障害、食物アレルギー等々については、保育園・幼稚園のみで解決するには、限界があり、児童福祉等に関する関係諸機関との適切な連携が

期待される。

こうした連携を実現するためには、保育を取り巻く全ての児童福祉施設、医療施設、関連する制度や政策を理解している必要がある。そして、直面した状況に応じて適切な機関や制度を活用しなければならない。これには、極めて広範囲な知識と、的確に現状を把握できる能力が要求される。こうした知識や能力は、保育現場の仕事の積み重ねだけで獲得することはできない。養成段階における知識の習得と研修段階における判断能力の獲得が必要であり、継続的に研鑽を積まなければ身につけることが困難である高度な資質であろう。

(3) 保護者対応能力

J.(1) 0024 保護者が安心して信頼して預けられるように、保護者の悩みや子育てについて適切なアドバイスが出来るようになってもらいたい。

J.(1) 0040 保護者の悩みや相談にきちんと対応できる。保護者が納得できるような対応ができる。

J.(1) 0175 話しをよく聞いてくれる保育者(相談できる)。よいアドバイスをしてくれる保育者

J.(1) 0221 保育士歴3年を過ぎると、保護者の目も少しずつ厳しくなってくるのか、保育の専門性が問われます。一般的な育児書に書いてあるようなことを言うようではダメで、経験と理論を結び付けて具体的に話せる保育士は信頼されます。やはり勉強熱心で向上心があり継続して努力できる人が強いです。そして何よりひとりひとりの子どもを大切にする保育士は保護者もよく知っているので大変人気があります。

J.(1) 0263 保護者自身の立場を理解し、受容してくれる保育士をもとめている。言い換えれば、保護者自身がまだ自立していない場合が最近特に見受けられる。保育士に認められ、見守られ抽象的に、又具体的に支援を受けて、はじめて子どもに親としての態度が取れる人が増加傾向にある。

J.(2) 0032 子育て支援については、ニーズに応じてのサービスよりも、子育ての大切さや楽しさについて気付いていただけるようにすることが必要だと思います。便利さのみ目が向きすぎていないでしょうか。保護者の方に「わが子ってかわいい！」と思えるよ

うに支援していきたいです。

J.(2) 0101 話を聞いてほしい、わかってほしいと保護者は願っています。しっかり思いや話を受容できる保育士であること。プロとしての確かな返事のできる保育士であること。

J.(2) 0287 保護者の立場を理解すると同時にそれが子どもにも与える影響をも考えたり見通したりしようとする力も大切と思う。

J.(2) 0362 保護者のいい聞き手となり子育て等の悩み事にも相談にのりアドバイスが出来ること。

J.(1)とJ.(2)で、共通して見られるのは、保護者の育児に関する悩み相談に乗ることである。こうしたことから子育てについて保護者自身が悩んでいる状況が、よく理解できる。とはいうものの新人保育士の多くは、未婚であり子どももない場合が多い。つまり、保護者より実践的な育児の経験が少ないのである。さらに保護者よりも、年齢が下であることが多い。そして、短大卒、専門学校卒の保育士である場合は、保護者よりも学歴が低いこともある。したがって、保育者から保護者に対して行われるアドバイスは、経験や一般論に基づくものではなく、保育に関する専門知識に基づくものでなければ説得力がない。そうでなければ保護者から信頼を得ることは困難であろう。養成機関における学習は、こうした点を踏まえる必要がある。

J.(1) 0021 第一に、社会生活において必要な、常識を身に付け、どんな保護者の方にも気持ちよく接することが求められると思います。

J.(1) 0024 保護者が安心して信頼して預けられるように、保護者の悩みや子育てについて適切なアドバイスが出来るようになってもらいたい。

J.(1) 0040 保護者の悩みや相談にきちんと対応できる。保護者が納得できるような対応ができる。

J.(1) 0152 一般的な教養や常識を身につけており、親への理解ができる。

J.(1) 0226 話しやすい先生、相談したい先生”だと思います。そのためには十分な知識と理解力を持って保護者の方が相談してよかったと思えるような受け答えができることだと思います。幼稚園は特に、保

護者の方と教員でその子を育てていこうという姿勢を示していく必要があると思います。そのためには、信頼関係が築けることと、多様な保護者の内面理解（常にプラスに考える）ことが大切です。

J.(1) 0227 保護者との関係は節度を守って、信頼関係を大切にします。

J.(2) 0368 専門的知識の習得はもちろんのこと、一般的な常識が身につけており、明るく楽しく堂々と仕事をこなす人材が求められる。

ここでは常識を身につけていることが求められている。ここでいう常識は、後出する「社会人の社会性」としての一般常識とは若干ニュアンスが異なり、保護者が信頼し、納得できるような資質としての常識という意味で記述がなされているようである。つまり、保護者とコミュニケーションをとったり、信頼関係を築き上げていったりする前提として、いわば人間関係の基礎として相手に求める資質としての常識ということが指摘されているのである。さらに、こうした常識を基盤にしつつ、専門知識を持ってコミュニケーションを取ることにより、保護者と信頼関係を築いていくことの重要性が記述されているのである。こうしたスキルについては、次のJ.(2)の記述に詳しく指摘されている。

J.(2) 0116 保護者の思いはそれぞれで多様な考えに対応していくためには、いろんな事例から研修することや、教育相談のロールプレイなども必要と考えます。子ども理解と同じくらい保護者理解が必要になっていくと思います。

J.(2) 0120 今、いろんな考えの保護者、そして学歴の高い人が多い中、知識もある方が多いので、保育士側も専門知識や常識知識をしっかりと勉強して、理論だっただけで答えられるようにしていけるよう日々勉強していかなければと思っています。

J.(2) 0285 保護者との連携は大変難しく、良かれと思って言ったことを誤解されることもよくあります。保護者の立場を考えながら話をすることが大切です。これから保育者になられる方には、特にコミュニケーションがうまくとれる力、相手のことを考えながら話をしたり聞いたりできる力が必要ではないか

と思います。もちろん、挨拶や言葉遣いなどもしっかりと身に付けておくことは大切だと思います。

ここで記述されている専門知識や保護者とのコミュニケーション能力は、先のJ.(1)の常識と一連の資質として位置づけられるものであると考えられるが、J.(2)の保育者の養成段階に対する要望として顕著に表れている。もちろん、こうした保育技術は研修段階で身につけることが難しい資質というわけでもないだろうが、ここで指摘されている背景は、おそらく対乳幼児という仕事を強くイメージしている養成段階の学生たちに対して、保育者という仕事は対保護者という保護者の育児支援についても重要な役割を果たしていることを喚起しているものと理解した方がよいのではないだろうか。そうした意味で、乳幼児に対する保育技術だけではなく、保護者を対象として教育相談などを行うための専門知識の獲得も重視しなければならず、そこには当然保護者とコミュニケーションを図ることも必要であるために、保育者養成機関に対する要望として、こうした点が記述されていると考えられる。

J.(1) 0359 保護者の方もいろいろで、なかなか難しい問題も山ずみです。最近の傾向では自分が中心。子供よりまずは自分の立場を主張するという保護者も多い。

J.(2) 0080 本来家庭でしつけるべきことを幼稚園に求める親が増えている。また子育てについて悩んだり、迷ったりしている親も多い。保護者に対応するときに、きちんとした自分の保育観をもっておくことが大切。しかし、若さ、経験不足から難しいこともある。その際には、先輩に素直に尋ねたり、意見交換できる人であってほしい。

J.(2) 0137 保護者からのニーズも大切にしていきたいところですが、子どもの教育を考えて保護者に指導できる教師になっていかなければならないと思っています。中心は子どもです。大人の都合で子ども達にしわよせがこないよう、幼児期のすこやかな成長を保障していかなければならないと考えています。

J.(2) 0206 保護者の気持ちによりそう姿勢を大切にすることだと思います。

保護者と保育園や幼稚園とで教育方針が異なることは、容易に想定される。こうした葛藤状況下において、いかに対処すべきか。ここに見られる考え方は、自らの保育観にしたがい自信をもって対応することや、子どもを中心に考えること、親の気持ちを斟酌することなどである。また、同僚の先輩に積極的に相談することも期待されている。

(4) 社会人としての社会性

J.(1) 0318 保護者は、専門家である。プロであると頼って、育児のノウハウを伝えてくれるものと思っているので、それに答えるべく、子育ての基礎基本を筋を通して身につけてほしいと願っているのでは。又社会人として通用する常識をもってコミュニケーションがとれる大人の保育士を望んでいるのではと思う。

J.(1) 0332 一般常識のある人。

J.(2) 0007 保育者に求められるものは、社会人としての常識を身に付けていることが一番ではないかと考えられる。

J.(2) 0229 社会的常識をもち、意欲や積極性のある学生の育成。

ここで指摘されているのは、保育の専門職者としての知識ではなく、社会人としての一般常識である。もちろん、この回答者が園長であることを考えれば、はるかに年少者の保育者や、養成段階の学生に対する意見なので、比較的厳しく指摘されることも、ある程度やむを得ないとも思われる。しかしながら、保育士や幼稚園教諭は、子どもたち相手だけではなく、その保護者に対応する能力を昨今、強く求められている。そうした現代的状況を勘案するならば、園長たちが一般常識を強く求めていることは、保育者養成機関の課題としても、強く留意しなければならない。

J.(2) 0176 社会人としての一般常識、マナーを身につける教育。

J.(2) 0284 一応の社会人としての必要なマナーを身につけ、社会人として組織の中で与えられた責任を果たす力を身に着ける。

J.(2) 0317 一般常識、社会人としてのマナー、など社会に出て困らないようにしてほしい。

ここでは、マナーに関する記述についてであるが、基本的な趣旨は前出の常識と同様であると思われる。大人として社会人として振る舞うことが求められていることがわかる。こうした保育者としての保育技術だけではなく、社会人としての常識やマナーなども保育者養成機関に強く求められている。

J.(1) 0260 社会人として、挨拶、応答、伝達などができること。

J.(2) 0296 保育士は人間関係が第一なので、社会性・協調性が重要である。

J.(2) 0328 人間性。基本的な一般教養、常識など各家庭生活の中で身につけておくべき内容のニーズが多い。養成校、機関でそれを身につけることはむずかしいと思われる。

「社会人としての社会性」では、J. (1) , J. (2) 両者共に社会人として必要最低限のこととして、挨拶、社会性や協調性等を求めている。しかし、こうした社会人として必要とされる能力は、人間形成そのものに関わる部分であるだけに、養成段階だけで獲得することが困難であろうとの指摘も存在している。もし、この点について養成校が付度するのであれば、それは入試選抜の時である。しかしながら、教育機関としての保育者養成校としては、保育者としての就職を希望する全ての学生が、ここで指摘されているような社会性を獲得できるようにしなければならない。

ま と め

自由記述の分析では、保育者養成機関という養成段階と保育園や幼稚園などの研修段階における保育者としての資質獲得に関する園長たちの具体的な意見に耳を傾けた。そして、両段階で獲得すべき資質には、どのように異なるのか、また、ここで明らかになったことは高等教育機関における保育者養成カリキュラムに対して、いかにフィードバック可能なのかについて、4つの視点から

分析を進めてきた。

その結果「保育者自身の性格」という視点からは、全体として、明るく元気で優しいことが極めて強く求められているが、これに加えて、園長たちは、努力や向上心といった前向きな姿勢の保育者養成を求めていることが分かった。こうした点については、保育者養成機関での動機付けは、必ずしも容易な状況ではない。保育者養成課程を専門学校や短期大学と四年制大学を比較した場合、四年制の学卒者の方が選択可能な職種が多いため、そもそも入学時点での保育者志向が弱い可能性が構造的に包含されている。ゆえに、入学者の先有傾向が重要となる。養成機関としては、保育者志向の強い受験者を選抜すれば容易に解決できる問題なのである。しかし昨今の18歳人口の減少は、所謂、全入時代を出現させており、選抜による解決も容易ではない。保育者養成機関は、知識や保育技術を教授するだけでなく、保育の現場からは全人的な教育が求められているのである。こうした点は、後述の社会性でも同様のことが考えられる。

「保育者としての専門性」という視点から、保護者の要望を踏まえると、広範囲にわたる保育者の資質が求められている。しかし、園長自身の体験を踏まえると、新しい領域に関する知識と長期にわたる系統的な学習が必要な資質という2つの傾向が認められた。また、保育園・幼稚園以外の施設との連携の重要性も指摘されていた。こうした点から保育者養成機関のカリキュラムと役割を考えると、時代に即した新しい知識、研修段階では獲得が難しい知識や技能、そして基礎学力の向上という3点が充実したカリキュラムを求められていると考えられる。

「保護者対応力」という視点からは、コミュニケーション能力が最も重視されている。専門知識としては、保護者の育児相談に答えることが求められている。しかし、その前段階として保護者と信頼関係を構築し、コミュニケーションを図らなければ、その専門知識も無意味なものになるということである。また、その際、十分に保護者の気持ちを汲み取ることも求められている。こうしたコミュニケーション能力は、保育者の個人的な資質に関わるものである。そのため、コミュニケーションが不得意な保育者に対しては、養成段階と研修段階を通じた長期の学習と研修が必要なのではないだろうか。

「社会人としての社会性」という視点からは、新人保育者は全体的に社会性が乏しいと感じているが、人間形成そのものに関わる部分であるだけに、養成段階だけに負わせるべき問題ではないとも考えていることが分かった。当然、新人保育士の多くは、園長や保護者よりも年齢、社会体験、実際の子育て経験など、いずれも劣ることが一般的な状況であろう。そうした意味では、保護者からも園長からも社会人としての基礎的な常識やマナーなどに関して注意されることは、何も保育者のみに指摘されることではなく、新規学卒者全般にいえることである。しかし、保育者は、その人間性に関する資質が重視されているため、その前提として謂わば、正しい社会人としての規範を強く求められていることは理解しておかなければならない。

こうしてみると、養成段階では、保育者の資質として人間性と専門知識の獲得が要請され、研修段階では、実践能力の獲得が要請されるという妥当性の高い方法による資質の獲得が求められていることが分かった。しかし、保育者の資質としての人間性や基礎学力は、高等教育機関もしくは中等後教育機関という養成段階のみで解決される課題ではない。したがって、その前段階の家庭教育、初等中等学校教育にも踏み込まなければならない。だがそれでは論点と責任が拡散する。少なくとも、養成段階と研修段階は保育者養成に直接的な責任を負っており、両者が協力して理想的な保育者養成を追求していかなければならないだろう。

注

- 1) 岡山県では、保育所のことを保育園という。このため本稿では、全て保育園と表記した。
- 2) 参照したURLは下記の通りである。ここには、岡山県内の認可保育園が掲載されている。<http://www.pref.okayama.jp/hoken/sisetu/hoikusyo.htm>
- 3) 高旗正人・池田隆英・中田周作(2007)の自由記述の分析は、まず、記述の中に頻出するキーワードを特定。その後、類似するカテゴリーを徐々に集約。最終的に、①保育者自身の性格、②保育者としての専門性、③保護者対応能力、④社会人としての社会性、という4つのカテゴリーにまとめた。ここで明

らかになった内容は、高旗正人・中田周作・池田隆英(2007)の結果とも、ほぼ一致していた。そのため、今回の分析視点として用いることにした。

参 考 文 献

- 1) 高旗正人・池田隆英・中田周作, 保育者養成への期待に関する調査研究～公立・私立／幼稚園・保育園による比較分析と自由記述の分析～, 日本子ども社会学会第14回学会大会, 於:昭和女子大学, 発表資料, 2007.
- 2) 高旗正人・中田周作・池田隆英, 保育者養成に対する社会的要請の調査研究, 中国学園紀要, 第6号, pp. 149-160, 2007.

謝 辞

本調査の質問紙作成にあたって、中国学園大学子ども学部准教授長廣真理子先生、中国短期大学保育学科教授森元眞紀子先生に貴重なご意見を頂いた。また、調査票の発送作業と調査データの入力作業に際して、中国学園大学子ども学部の学生たちに授業を通して協力を頂いた。この場を借りて感謝の意を表したい。なお、この研究は、中国学園大学・中国短期大学から頂いた平成18年度特別研究助成費による『『認定こども園（総合施設）』の開設に係る課題と人材育成に関する実証的研究』（高旗正人・中田周作）の一部である。

